# SEAMAIL

Newsletter from Software Engineers Association

Vol. 12, Number 4 - 5 March, 2000


## 目　次


| | | |
|---|---|---|
| 編集部から | | 1 |
| ISFST'99 特集 | | 2 |
| ISFST'99 報告 | 野呂昌満 | 2 |
| 2 度目の ISFST | 山本恭裕 | 5 |
| ISFST'99 in 南京に参加して | 方学芬 | 7 |
| Ricard Stallman と旅して | 林香 | 8 |
| 計算機世界(華東版) Stallman Interview | | 12 |
| Best 19 Papers | | 13 |
| Index of Papers | | 125 |

# ソフトウェア技術者協会

## Software Engineers Asociation

ソフトウェア技術者協会 (SEA) は，ソフトウェアハウス，コンピュータメーカ，計算センタ，エンドユーザ，大学，研究所など，それぞれ異なった環境に置かれているソフトウェア技術者または研究者が，そうした社会組織の壁を越えて，各自の経験や技術を自由に交流しあうための「場」として，1985年 12月に設立されました．

その主な活動は，機関誌 SEAMAIL の発行，支部および研究分科会の運営，セミナー／ワークショップ／シンポジウムなどのイベントの開催，および内外の関係諸団体との交流です．発足当初約 200人にすぎなかった会員数もその後飛躍的に増加し，現在，北は北海道から南は沖縄まで，500 余名を越えるメンバーを擁するにいたりました．法人賛助会員も 20社を数えます．支部は，東京以外に，関西，横浜，長野，名古屋，九州，広島，東北の各地区で設立されており，その他の地域でも設立準備をしています．分科会は，東京，関西，名古屋で，それぞれいくつかが活動しており，その他の支部でも，月例会やフォーラムが定期的に開催されています．

「現在のソフトウェア界における最大の課題は，技術移転の促進である」といわれています．これまでわが国には，そのための適切な社会的メカニズムが欠けていたように思われます．SEA は，そうした欠落を補うべく，これからますます活発な活動を展開して行きたいと考えています．いままで日本にはなかったこの新しいプロフェッショナル・ソサイエティの発展のために，ぜひとも，あなたのお力を貸してください．


代表幹事： 玉井哲雄

常任幹事： 荒木啓二郎 坂本啓司 高橋光裕 田中一夫 中野秀男 深瀬弘恭

幹事： 市川寛 伊藤昌夫 大場充 落水浩一郎 窪田芳夫 熊谷章 小林修 桜井麻里
酒匂寛 塩谷和範 篠崎直二郎 新谷勝利 杉田義明 武田淳男 中来田秀樹
野中哲 野村行憲 野呂昌満 端山毅 平尾一浩 藤野誠治
松原友夫 山崎利治 和田喜久男

事務局長： 岸田孝一

会計監事： 辻淳二 吉村成弘

分科会世話人 環境分科会(SIGENV)：塩谷和範 田中慎一郎 渡邊雄一
教育分科会(SIGEDU)：君島浩 篠崎直二郎 杉田義明 中園順三
ネットワーク分科会(SIGNET)：人見膚 松本理恵
プロセス分科会 (SEA-SPIN))：伊藤昌夫 坂本啓司 高橋光裕 田中一夫 端山毅 藤野誠治

支部世話人 関西支部：臼井義美 小林修 中野秀男 横山博司
横浜支部：野中哲 藤野晃延 北條正顕
長野支部：市川寛 佐藤千明
名古屋支部：筏井美枝子 石川 雅彦 角谷裕司 野呂昌満
九州支部：武田淳男 張漢明 平尾一浩
広島支部：大場充 佐藤康臣 谷純一郎
東北支部：河村一樹 布川博士 野村行憲 和田勇

賛助会員会社：ジェーエムエーシステムズ 東芝アドバンストシステム ＳＲＡ ＰＦＵ
東電ソフトウェア 構造計画研究所 さくらケーシーエス 富士通
オムロンソフトウェア 中央システム 富士通エフ・アイ・ビー
新日本製鉄 ダイキン工業 東北コンピュータ・サービス オムロン
アイシーエス ＳＲＡ中国 日本電気ソフトウェア 富士電機
ブラザー工業 オリンパス光学工業 リコー アルテミスインターナショナル（以上24社）



ＳＥＡＭＡＩＬ Ｖｏｌ．１２，Ｎｏ．４－５ ２０００年３月３０日発行
編集人 岸田孝一
発行人 ソフトウェア技術者協会（ＳＥＡ）
〒１６０-０００４ 東京都新宿区四谷３－１２ 丸正ビル５Ｆ
T: 03-3356-1077 F: 03-3356-1072 sea@sea.or.jp
印刷所 有限会社 錦正社 〒１３０-００１３ 東京都墨田区錦糸町４－３－１４
定価 １、０００円 （禁無断転載）

# 編集部から

☆

この Vol.12 - No.4 は，昨年秋に中国・南京で開催された ISFST'99 特集です．

☆☆

プログラム委員長として精力的に活躍された野呂昌満先生 (南山大学) には，長文の総括報告をいただきました．

☆☆☆

参加者の中からは，山本恭裕さん (NAIST) および方学芬さん (SRA) のおふたりが，それぞれ感想を寄稿してくださいました．また，林香さん (SRA) からは，基調講演者 Richard Stallman 氏の人柄を描いた貴重な随行記録をいただきました．

☆☆☆☆

さて，論文ですが，分厚い (全 460ページ弱) Proceeding をそのまま復刻するのは無理なので，野呂先生にお願いして選んでいただいたいた Best Papers 19篇を採録することにしました．

☆☆☆☆☆

Computer World China (1999/12/6 号)に掲載された Stallman 氏のインタビュー記事を語参考までに転載しておきました (Page 12)．

☆☆☆☆☆☆

実行委員長の伊藤昌夫さんにも執筆をお願いしたのですが，公私ともに多忙ということで，ようやく次のような「詩」が mail されてきました．

金陵

城市を超え，空がつきぬける時
路地に満ちる声，どこまでも暖かに．

夜．

花を含んだ，ふっくらした顔の娘．
露店の前．素知らぬ顔で歩く尖った男．

今．

目の前で，
チェシャ猫のように浮かんでは
消える K 氏の笑い．

とても小さな ちいさな鍵を
なくしたのは
誰だったのか．

☆☆☆☆☆☆☆

# ISFST99報告

## ― プログラム委員会と本会議に出席して ―

野呂 昌満

(南山大学)

### 1. はじめに

今回のISFST(international Symposium on Future Software Technology)には，プログラム委員長として，その設計と実現(計画と実施というべきであろうか？)に関わってきた．ここでは，1999年8月に山西省大原で開いたプログラム委員会と10月に南京古南都ホテル(Nanjing Grand Hotel)で行なわれた本会議について，概要を報告する．

### 2. プログラム委員会報告

今回は一般論文(Full Papers)とワーキンググループ論文(Working Group Papers)を併せて121編と，数多くの投稿があった．

これらを1編につき3名の査読者を割り当てて査読を依頼した．中国から投稿された論文には中国のプログラム委員2名，中国以外のプログラム委員1名を割り当て，中国以外から投稿された論文には，中国以外のプログラム委員2名，中国のプログラム委員1名を割り当てた．この査読結果をもとに最終的な論文の順位づけを行ない，中国側のプログラム委員とそれ以外のプログラム委員で，それぞれの範疇からほぼ同数の論文を推薦することにした．

上の方策は，中国からの論文とそれ以外の地域からの論文の平均的な質の差を解消するためにとったものである．すなわち，同様の基準で論文審査を行なうと，中国からの論文はほとんど受理されなくなってしまう可能性があると考え，不均衡を是正しようと考えたのである．後知恵にはなるが，これらの配慮は近い将来必要なくなるのではないかと，個人的には感じた．近年，中国の研究水準が世界のそれに追いついてきていると感じたのがその理由である．

しかし，プログラム委員の仕事とはどういうものかということが，まだ中国側のプログラム委員に十分理解されていないように思われる現状においては，なおしばらく以上のような配慮が必要かも知れない．余談になるが，論文の選定をこのように分離して行なうことになったので，委員会(中国以外の委員のサブグループ)の司会は日本語でかまわないいとひそかに考えていた．しかし，Reading大学のJonathan Bowen教授がいたことに気づき，自分の早合点を恥じた私であった:-)．

論文募集の案内を見てもらえばわかるが，著者は，一般論文とワーキンググループ論文の別を，投稿のさいに指定できることになっている．基本的には，この指定にもとづいて査読し，採録/返戻の振り分けをした．加えて，できるだけ多くの参加者を集めるべく，一般論文として不採録のものも，ワーキンググループ論文として採録可能かどうかを検討した．

以上の審査過程を経て，結果として48編の論文を一般論文として採用し，39編をワーキンググループ論文として会議録に掲載した．

論文募集の段階であらかじめ決めていたことではあるが，プログラムは，これまでのISFSTの構成にならって編成することを再度確認した．すなわち，特別および招待講演・一般論文発表・ワーキンググループ議論・ツール展示を配置することにした．採録論文の決定後は，プログラム構成に関する作業は比較的円滑に行なえた．原案を日本側のプログラム委員のサブグループで作成し，全体の了解をとった．

### 3. 本会議報告

本会議の報告で最初に述べなければならないのは，Keynote Speakerとして招待したRichard Stallmanについてであろう．岸田さんいうところの「傍若無人」という形容詞は絶妙であり．この言葉はまさにかれを形容するためにあると感じた．とにかく，単にマイペースというだけではなく，押しつけも非常に強ければ，面白くないと思った相手とは口はきかないと決めているようだ．創造性に対する尊敬の念も人一倍なのだが，それ以外の基準で話す相手を決めているような気もするのである．とにかく，文字通り傍若無人なのだ．今回参加されなかった方は，かれに会って等身大のStallmanを見られなかったことだけをとっても，随分損をしたものだと考える次第である．個人的には，かれのようにいわゆる「無礼」な人間は非常に好きだ．かれはProgramming Artistなのだと勝手に形容して納得している．

さて肝心の講演の内容だが，一言でいってしまえば「ソフトウェアを特定の利益団体から解放し，"ソフトウェア開発における自由"を勝ちとった」という話である．GNUがその信条とするCopyleftやFree Softwareという概念は，ソフトウェアの開発や運用に関わるすべての人間のソフトウェアの変更に関する自由

(Freedom) を保証するものである．それによって得られるものは，現在の著作権をたてにとった独占販売を前提とするソフトウェアのあり方で得られるものよりもはるかに大きい，と彼は主張する．「GNU のソフトウェアはただで使えるから Free Software や Feeware と呼ばれるなんて思っていると大間違いなのだ」と，かれは伝導の旅を続けているのである．

他人の仕事に対してあれこれいうのは非常に楽なので，日頃はつつつしむように心がけているのであるが，今回は，それがこの原稿を書いている人間の役割だと考えて，あえてあれこれいうことにしたい．

Richard の話を聞いて私は「あ，Bob Dylan だな！」と思った．私は Bob Dylan をかつては自分の心のなかの Hero として尊敬していたので，その外延として Stallman にも好感を抱いた．

Bob Dylan は，次のような意味で，よくも悪くも私の Hero であった；

1. 常識と呼ばれる既成の概念を打ち壊し，良識と呼ぶ新しい概念を提示したこと．
2. 批判するだけではなく，作曲や作詩という創作活動を通して自分の信念を形にしてきたこと．
3. ある意味で非常に無責任なところ．
4. 自分だけがかれをわかっているというマニアックな気分にさせるところ．
5. 欧米崇拝の象徴的な存在．
6. 他の一流音楽家に影響を与えるだけでなく，かれの信念や行動を理解した同じ形での後継者が自発的に育ったこと．
7. つまり Bob Dylan は宗教家であり教祖であること．
8. ネクタイをしないところ．容姿端麗ではないところ．

ここで，"Bob Dylan" という文字列を "Richard Stallman" と置き換え，同じく "Bob Dylan の歌" を "GNU Software" と置き換えれば，Bob と Richard の私の心のなかでの相似が理解できるだろう．すなわち，Richard Stallman は，次のような意味で，よくも悪くも私がその行動 (GNU Software の開発に関することだけを指す) に関連して，尊敬の念を禁じ得ない対象なのである：

1. 常識と呼ばれる既成の概念を打ち壊し，良識と呼ぶ新しい概念を提示したこと．
2. 批判するだけではなく，ソフトウェア作成と言う創作活動を通して自分の信念を形にしてきたこと．
3. ある意味で非常に無責任なところ．
4. 自分だけがかれをわかっているというマニアックな気分にさせるところ．
5. 欧米崇拝の象徴的な存在．
6. 他のプログラマに影響を与えるだけでなく，かれの信念や行動を理解した同じ形での後継者が自発的に育ったこと．
7. つまり Ricahrd Stallman は宗教家であり教祖であること．
8. ネクタイをしないところ．容姿端麗ではないところ．

問題は，かれらが才能のある人間だということである．そして，かれらがおそらく，それを認識していないかも知れないということである．才能があり Hero になってしまえば，自分とそのまわりの何人かの生活を支えることはできる．しかし Hero は，そんなにたくさんはいらないのである．みんなが Hero になろうとすると，Hero を支える図式が成り立たなくなり，結果としてその信じるところが実現できなくなってしまうという矛盾が生じる．

ひょっとしたら，かれらは，この矛盾をある段階から認知していて，しかし，にもかかわらず，「どうせばれやしないだろう」と無責任を決めこんでいるのかも知れない．確信犯であるにせよ，そうで無いにせよ，Hero を支えるには多くの賛同者がいる．

CDを出したり，コンサートをやったりと，商業主義に乗った露出を受け止めてくれた多くのファンのおかげで，Bob Dylan はこれまで生き抜くことができた．同じく，現代社会の電子システムを巧みに利用し，無償のプログラム開発と寄付という多くの支援のおかげで，Richard Stallman すなわち GNU は生き残ってきたのである．

私は，かれらを無責任だと批判しているのではない．むしろ尊敬している．この図式を理解した上で，GNU を支えるために何ができるかを考えることが重要だ，といっているのだ．Stallman のいうように「Linux と呼ばずに，GNU/Linux と呼び，GNU の存在を忘れないようにする」こともひとつだろう．SRA などがやっているように，Free Software の運用から収益を得て，そのいくらかを GNU に還元するのもよい考えである．しかし，同じことで Hero は 1 人でいい．他の人間はそれを支えることを考えればいい．そして，支えている人間は他のことで Hero になればいい，と私は考える．

Stallman の話はこれぐらいにして，その他気づいたことを書き留めておく．

一般論文発表は，かなり質の高い論文もあり，同種の国際会議と較べても遜色のないものになってきたと思う．特に，単なる学術会議としてではなく，ソフトウェア工学の実践をも視野に入れた会議としては，すぐれた論文が集まったと感じた．これは，年々増加す

る投稿数の多さ，そして，玉石混淆を認めるプログラム委員会の寛容さという，一見矛盾したように見える長期的視野に立った意思決定のたまものだと考えられる．今後も SEA では，フトウェア工学国際会議 (ICSE) やアジア環太平洋ソフトウェア工学国際会議 (APSEC) などとの協調をすすめると同時に，SEA 独自の催しとしての ISFST の存在を，よき伝統として守り育てて行くべきであろう．

ワーキンググループについていえば，やはり主題の選び方がその成否を決める第一の要因だと考えられる．今回は主題をあらかじめ設定することはせず，投稿のあった論文を KJ 法よろしくグループ分けし，結果として4つのグループを作った．私は自分の発表があった "Life-cycle Support" のグループに参加したのだが，議論の活発さという観点からは，若干疑問が残った．その理由は，発表された論文の主題があまりに多岐に渡り過ぎ，議論の焦点が定まらなかったことである．今回のようなグループ編成の方法ではこうした結果になるのも仕方がないと思われる．現在計画中のソフトウェアシンポジウム2000では，いくつかのセッションについて，あらかじめ主題を決めて発表募集を行うことを試行している．この成否を見守り，うまく行った場合は，ISFST でも将来この方法を採ることも一考に値するだろう．

**4. おわりに**

以上，駆け足ではあるが，ISFST'99 をその計画段階から振り返ってみた．来年度以降解決すべき問題をいくつか指摘して，本稿の結びとしたい．

最初の課題は，発表者の欠席 (No Show) にいかに対処すべきかである．今回も，一般論文発表およびワーキンググループ発表を併せて，10件を下らない欠席者がいた．多くは，中国からの論文の著者の欠席である．会議の権威を気にする向きもあるかも知れないが，むしろ問題は他の出席者の志気に影響することである．

欠席者の多くは論文の第一著者で学生である場合が多い．結局，参加費を払えないのである．第二著者以下の発表を促しても，それが偉い先生であって英語が駄目 (!)，結果として不発表ということもある．そのような学生が発表できる能力があるのであれば，会議参加者として正式には登録していなくても，当該セッションの出席と発表だけ認めるというように，登録の規則を柔軟に読みかえる必要があるかも知れない．

もう１つの課題は，投稿規定等の厳密化である．現状では，他の国際会議や雑誌への二重投稿や既発表の研究業績の再投稿は認めないと論文募集にうたっている．しかし，今回も APSEC'99 へ一字一句違わぬ論文を投稿してきた著者もいた．私は APSEC の一プログラム委員でしかなかったので，査読者の守秘義務から，著者に投稿違反を警告するわけにもいかず困った．

基本的には，このようなことは著者の個人責任に帰する問題なので，プログラム委員会が指導をすることではなく，本人の自覚を待つしかないことではある．しかし，APSEC のプログラム委員長と相談して，もう少し積極的な対応をとる必要があったかも知れないと反省している．

これに類することとして，最終原稿のページ数を厳守させる必要性も感じた．ほとんどの著者は，査読のさいの照会事項を参考にして，論文を書き直し，ページ制限を守ってくれたのだが．さまざまな理由により，この作業を行なえない著者も出てくる．今回は，そうした著者がいることを想定せずに，最終原稿募集を行なった．最終原稿募集のさいに，「ページ制限を守らない場合は発表権を取り消す」等の警告を与えるべきだと考える次第である．

来年は，これらのことを含めて，同じ失敗を繰り返さずにより盛況で有意義な ISFST が開催されることを祈って本稿を終りたい．

# 2度目のISFST

山本 恭裕
(奈良先端科学技術大学院大学)

## 1. はじめに

ISFST'99 が，10月 27日から 29日までの３日間にわたって，中国の７大古都の一つに数えられる江蘇省南京市で開催されました．会議場および宿泊所となったのは，南京古南都飯店 (Nanjing Grand Hotel) という Four Stars のホテルで，参加費が高いのにも納得(？)の立派な建物でした．

私自身としては，昨年のISFST'98 (杭州) に続いて２度目の参加となりました．以下，昨年の会議との比較も交えながら，ISFST'99について報告したいと思います．

## 2. 上海経由で南京へ

関空から上海へと飛び，南京までのバスを待つ間上海の街を少し歩きましたが，中華人民共和国建国50周年の威力でしょうか，１年前と比較しても高層ビルの数が一層ふえていたように感じました．地面に落ちているゴミは明らかに少なくなっていましたが，少し空気が汚くなっているようでした．道路では公安のクルマが多く走っているせいか，クルマも人も信号を守っていました．去年は，信号機だけが空しく色を変えていたのですが .....

昨年は，開催地となる杭州まで列車で行きましたが，今回は上海から南京まで40人くらいでバス移動となりました．南京までのバスはナカナカなものでした．狭い座席で揺られること４～5時間．南京のホテルに到着したのは日付も変わろうかという時間帯でした．早くも会議参加者同士で思い出に残る体験を共有することができました．

南京は，上海よりもさらに汚れた空気で，少し外を歩くと目や喉に痛みを感じてしまいました．思ったよりも都会で，スーパーマーケットに売ってるものを見ると，非常に西洋的なものが多くありました．去年の杭州のスーパーでは，不思議な日本語の書いたものが流行っているように思えたのですが，早くも廃れてしまったようです．

## 3. Keynote Speech および Invited Talk

### 3.1. Keynote Speech 1

Embedded Operating System and "Nu-Wa" Project
by Professor Xichang Zhong

Hopen (hope と open とからの造語) という組み込みOS と，それを含めた中国におけるこれからの情報技術産業，情報家電市場を視野に入れたプロジェクト "Nu-Wa" についての講演でした．"Nu-Wa"は中国神話の女神の名前だそうで，プロジェクトの内容だけでなくプロジェクト名に関しても，マイクロソフトの "Venus" プロジェクトに対抗しているようです．

講演の中に登場したトピックは非常に多岐にわたり，PDA やネットワークに関して，さまざまな研究が進められていること，Hopen が非常に軽い OS であることなどが紹介されました．プロジェクトで対象としている範囲が非常に広いという点でも，"Venus" プロジェクトを上回る勢いのようです．

講演全体を通して，これからの中国における情報産業を米国（特にマイクロソフト）に支配されてはならないという危機感とともに，組み込み OS という根幹の技術をもとに，21世紀の情報産業での主導権を握ろうとする野心のようなものが感じられました．

### 3.2. Keynote Speech 2

The Free Software Movement and the GNU/Linux Operating System
by Richard Stallman

この講演は，おそらく今回の会議の一番の目玉であったと(少なくとも個人的には)思われますが，直後のセッションで自分の発表があったため，準備に追われ残念ながら出席できませんでした (しかし，おなじ講演を聴く機会が帰国後与えられたので後述します)．

### 3.3. Invited Talk

Developing the Network Economy of China Hard!
by Professor Lu Xue Shi

中国の情報産業，インターネット普及，情報技術などについて，細かに数字を列挙し，その勢いと予想を述べておられました．残念ながら，中国語での発表で，Songmao Zhang さんの通訳で英語となっていたので，実質的な講演時間は短いものとなってしまいました．非常に嫌そうに通訳しているSongmaoさんを見ながら，そんな態度でかの女は大丈夫なのか，と他人事ながら少し心配になりましたが，最後は "Thank you for wasting your time" と締め括り，会場の一部で大受けでした．

内容としては，講演の半分ほどの時間，表になった

さまざまな数字が読み上げられました．あまりにもたくさんの数字が出てきたため，注目すべき数字・数値がどれなのかが絞りきれませんでしたが，日本では考えられないようなスピードで，いろいろなモノの普及が進み，かつ勢いを保ったままの増加が予想されているということは非常によく分かりました．講演の後半には，これからのインターネットエコノミー，ネットワークエコノミーといったことが，国家レベルの戦略として述べられていたように思います．また，米国，特に Wintel，マイクロソフトさらには Bill Gates への対抗心でいっぱいで，米国以外の国々で「包囲網」のようなものを形成したいのかなという印象を受けました．

しかし，Post-PC という捉え方そのものが，Wintel 連合の考えに沿ったものなような気がしました．個人的意見ですが，Wintel 側こそが，これからは Post-PC だと考えているように思えてなりません．Wintel への（ひいては米国への）対抗心から Post-PC の世界で競争しようとするよりは，PC の普及，ウェブなどインターネットの普及，といったものを過渡的なものとして捉えた方が面白いのではないかと思います．

## 4. Technical Paper Session および Working Group

Opening Ceremony のときの人の集まり具合から考えると，今回の参加者は100人以上だったでしょうか．通常セッション中はそこまでの人はいなかったのかもしれませんが，各セッションとも発表・質疑応答とも活発におこなわれたようです．昨年はたしか2トラックだったと記憶していますが，今回はセッション全体を通して3トラックでした．

私が参加したセッションは，

Technical Paper Session:
- 1-C: Visual Programming
- 2-B: CSCW and Graphics
- 3-C: User Interface
- 4-A: Distributed Computing

Working Group Session:
- 4: Agent and Artificial Intelligence

でした．

これらのセッションは，分類としては「その他」という印象がありましたが，各セッションともバラエティに富んだ発表がおこなわれ，質疑応答も非常に活発で，少々驚いて(？)しまいました．

昨年の会議では，発表の後の質疑応答が地味で，質問やコメントがなかったり，あったとしても一つ二つといった程度でしたが，今回私が参加したセッションでは，いくつもの質問やコメントが出ていました．質問が多いときには時間をオーバーすることもありました．去年多く見られた "No Show" も Technical Paper Session 全体で数人しかいなかったと思います．

また，前回は，論文を OHP シートにコピーしてそれを読む，といった発表をされた方が何人かいましたが，今回はそのような人はいませんでした．PowerPoint を使ってのオンラインプレゼンテーションが非常に多く見られました．前回と同じ方が参加されているわけではないので単純に比較はできませんが，1年間での変化の大きさが感じられました．

## 5. おわりに

南京大虐殺記念館の入口にかかったパネルに，次の一文がありました．

> "Past experience, if not forgotten, is the guide to the future."

## 6. 追記

中国からの帰国した翌日，FSF & SEA 主催の「第5回東京 GNU テクニカルセミナー」に参加し，南京で聴き逃した Richard Stallman の講演を聴くことができました．講演時間が1時間と短かったせいか，残念ながらかれのダンスは見られませんでしたが，Free Software 運動の動機や目的，また Free Software によって世の中の人々が Cooperation することができ，よりよい社会になっていく，というかれのフィロソフィーがよくわかりました．

# ISFST'99 in 南京に参加して

方 学芬
(SRA)

南京は，武漢および重慶とならんで，中国の「三大溶鉱炉」といわれているところです(つまり，夏がそれだけ暑いということ)．武漢出身の私にとっては，まるで故郷に帰ったような親近感がありました．日本にくる前に何回か，武漢から上海への楊子江の船旅で通ったことはありますが，実際に南京の市内に入ったのは今度が初めてでした．

日本から南京へは，直行便の飛行機がないので，上海経由ということになります．往きは，中国側でチャーターしてくれたバスで高速道路を走って行きました．ただ，日本からの参加者のフライトがばらばらだったので，わたしたちは，昼過ぎに上海に着き，仕事で前日から上海に泊まっていた岸田さんの部屋に預けて，上海の目抜き通りである南京路をぶらぶら散歩しました．

ひさしぶり(1988年の第2回日中シンポジウム in 杭州のとき以来)の私の目に映る上海は，ほんとうに驚くほど変っていました．小さい頃に憬れた上海の風景を，あらためてまた，この旅で実感できたような気がします．文字通り，中国の経済・商業の中心としての上海の発展は，とても印象的でした．

南京は，上海ほど経済的に発展してはいないようですが，中国の他のの大都市並みに高層ビルが林立しています．今回は，シンポジウムの会場が泊まっているのホテルの中に設けられていたこともあって，あまり外に出る機械はありませんでしたが，幸い参加者の人数が例年より多かったので，いろいろな国からきたいろいろな人と話をすることができました．

こうした参加者数の増加は，SEA のみなさんの継続的な努力のおかげで，ISFSTの名前が中国そしてアジア各国によく知られるようになったからだと思います．

中国国内からは，各地の大学や研究所からの研究者や大学院生たちが会議に集まってきていました．中国のソフトウェア界は，これまで実践的な技術より，むしろ理論面を重視してきたような感じでしたが，最近では，実用技術分野にも関心が移ってきているように感じられました．国立大学といっても，国からの研究費が限られていることもあって，コンピュータ科学科の教授たちは，企業での兼職やプロジェクトの開発にも力を入れているようです．

プロジェクトの遂行のため，半年くらいのあいだ大学を離れて別の都市で開発を行うことなども，まれではないようです．大学院生も，実際のプロジェクト開発を通していろいろなことを学んでいます．十数年前と比べ，それぞれの大学に大きな変化が訪れてきています．そうした時代の動きに取り残された学科間の合併や大学間の合併も話題になっていました．社会全体の改革に遅れないよう，大学の関係者たちもも必死です．国が決められた定員以外にも学生を募集し，授業だけで精一杯になる先生たちが多いのも現実です．にもかかわらず，先生方が会社の役員になったり，学生が創業した会社の成功例などの話もいろいろ聞かされました．

大きな成功を収めているソフトウェア会社「方正」グループ(これは北京大学が作った会社です)もその代表的な例だといえましょう．シンポジウムに参加した学生たちはみな活気にあふれていて，なんだか興奮を覚えました．インターネットが普及したお陰で，中国と外部の世界とのあいだがとても近くなったという感じがしました．こんなふうに感じたのは，今回が初めてです．逆に，日本で暮らしている自分のほうが，時代のスピードにいくらか乗り遅れているのではないかという不安が，ちょっと心をよぎりました．これからの産業として，IT産業は，きっと近いうちに中国でも強大な業界に成長していくだろうと思います．

ところで，中国で最も古いIT週刊紙：計算機世界(Computer World China)の10月25日号に岸田さんのインタビュー記事が載っていました，タイトルはなんと「日本軟件怪侠」(日本ソフトウェア界のヤクザ！)です．面白く読みました．

# Richard Stallman と旅して

林 香

(SRA)

## 0. はじめに

Richrad Stallman 氏が南京で開催される ISFST'99 のキーノートスピーカーとして招待されたのですが，主催の SEA だけでは旅費の捻出が苦しいとのことでした．そこで，その不足分をカバーするために，SRA で講演会を企画しました．おかげで，かれと数日行動を共にすることになりました．私の役目は，Richrad の東京での講演会を問題なく開催し，その後上海まで無事に送り届けることでした．かれとは初対面ですし，何人かの友人から，変った行動をすると聞いていましたので，覚悟はできていました．

結論をいえば，かれは変人ではなく，とても愛すべきアメリカ人でした．かれのエピソードを酒の肴に話していたら，面白いので，SEAMAILに何か書けとの依頼が編集部からありましたので，上海発成田までの帰国の飛行機の中でタイプしています．あえて，Richardの奇行に近い点を取り上げて話しますので，かれを変人と誤解される方がいるのではないかと危惧しています．もし，この雑文を読んで，かれを変人と思われる方がいたら，それは誤解です．私の文章表現能力のなさゆえのことですので，どうか誤解しないでください．

さて，これから，時間軸に沿って，いかにもかれらしいと思った点を書いていきます．かれと面識のある方は，「なんだそんなことか」と思われると思いますが，初対面ゆえに強い印象を受けた私としては，ぜひ，かれを知らない人に聞いてほしいエピソードです．

## 1. ネットワーク・コネクション

Richardの到着は 10月 23日の土曜日でした．成田空港での出迎えは，10年来の友人ということで，引地信之君にお願いしました．かれは，FSFs (Free Software Foundation) の設立当時，SRA からのボランティア要員として，2年ほどボストンで働いていました．MIT の AI Lab. の廊下で Richard と一緒に Programming をしていた仲間の一人です．学生の勉強のための SUN を早朝から占拠していたため，教授たちの怒りをかってしまい，SUN を撤去されたりした経験を持っています．

Richard はあまりにもたくさんの人と会っているので，記憶に残っている日本人は，竹内郁雄さんや岸田孝一さんなど，ほんの数人しかいないそうだというので，ここは，念には念を入れて引地君に出迎えをお願いしました．出迎えのあと，Richard をホテルに送り届けて，SRAの四谷事務所で待ち合わせをし，次週のの講演会の準備をする予定だったのですが，予定の時間を大幅に過ぎても引地君が事務所に現れません．

不安に思っていると，3時間遅れで，やってきました．いったいどうしたのかと問い詰めると，ホテルに到着直後，米国のかれのサイトに電話してログインしようとして，長距離電話をかけたのだか，どうしてもつながらず，Richardが怒り出してしまって大変であった，なだめるのに一苦労したとの話．

かれは一日でもメイルを読まないと，活動に多大な障害になるとのことで，何が何でもメイルを読みたいと，引地君にホテルへの確認，交渉を依頼しました．つながらなかった原因は，ホテルの交換機がすべての接続可能なエリアの国コード，エリアコードを登録しておく方式のものであり，つい最近，Richard のホームサイトのある場所のエリアコードが変更されたことに追随していなかったためとのことでした．

Richard は非常にスマートな人間のようで，この原因を事前に予想し，引地君にその点をホテルの人間に確認するよう依頼していたそうです．そして，もしその予想通りの原因だとすれば，fix されるのは月曜だろうとも予言し，その通りの答えがホテルから返ってきました．これで，Richard は完全に切れて，もうこのホテルには泊まりたくない，どうしても泊まらなければならないのなら，かれのサイトにログインできる手段を用意してくれということになり，引地君が四苦八苦したそうです．

詳しくは書けませんが，とりあえず，Richard を納得させる方法を提供し，逃げ出してきたのこと，.... お疲れさまでした！

このままでは，フラストレーションのため講演会に支障が出る恐れがありますので，何か対策を立てねばなりません．かれのアカウントをテンポラリに SRA が提供するという手もありますが，週末ゆえ社内の正式な手続きは踏めません．そこで思いついたのが，私が持っていた PHS データカードです．

このカードを使うと，DDI の PPP ポイントにアクセスできる，しかも，その登録は Web でできるという情報を提供してくれた友人がいたので，早速登録しました．試してみると，問題なく接続できます．これで大丈夫ということで，講演会の日の昼食時間に，利用法を説明したところ，食事もそこそこに会場に戻

り，試していました．結果はOK．子供のように喜んでいました．これで，どこでもメイルを読めるということで，その後，なんども「これはよい」を連発していました．

かれは，TCATでも成田でもPHSカードを使い続け，中国から再度日本に戻るということで，いまだに返してもらっていません．11月1日のFSF & SEA共催のかれの講演会の後には奪い返さねばと思っています(最終的に米国に戻る朝，ホテルのフロントに預けておいてくれましたので，無事に手元に戻ってきました．やれやれ！)．

## 2. 講演会

かれの講演を聞くのは，私は初めてなので，大変印象的でした．かれの話を何度も聞いている引地君にいわせると，いつも通りの話であったようです．Richard自身も，「この話は何度もしているので，寝ていても話せる，実際昨夜は徹夜で本を読んでいたので，寝てしまうかもしれない，寝たら起こしてね」などとお茶目なことをいっていました．

講演の内容は，別の機会に報告するとして，ここではかれのふるまいについてだけ書きます．

私は，Power Pointを使って講演当日のタイム・スケジュールをプロジェクションしていたのですが，Richardは講演会場に入ってくるなり，"I don't need this." といって，プロジェクタの電源をきってしまいました．かれにとって，Windows + PowerPointが不要なのか，プロジェクタが必要ないのか，どちらも必要ないのかは，定かではありませんでした．

"I need this to make a just 2 minutes opening talk." といって無理やり電源を入れた私です．怒るかなと思ったのですが，返事は軽く "OK" でした．しかし，私が話し始めて1分で，かれは靴を脱ぎ，ダンスを踊り始めました．とても，話を続けることができなくなり，かれにバトンを渡した次第です．

昼食に出かけるときも，ダンスを踊っていましたので，なんというダンスなのかと尋ねたところ，ハンガリアン・ダンスのようなものだが，正式ではないとの答えでした．講演の間も，通訳さんをからかうなどしての笑いを取りながら，結構のりのりでありました．しかし，どうしても通訳さんが話をしているあいだの間が持たないらしく，例の長髪を目の前にかざして，枝毛を見つけ，それを噛み切るという行為を続けておりました．このあたりがかれの「ふるまい」が変人だといわれる所以であろうと納得しました．また，有名なかれのダンスも，退屈が講じるにつれて，頻繁にでておりました．

講演の最後には，聖職者のような上っ張りを持ち出して身にまとい，頭には昔のハード・ディスクを後光のように被って，説教をジョークしました．「迷える子羊たちよ，GNU教団のemacs教会に入信しなさい，さすれば救われます．viを使うと，多少の心の痛みが伴うだろうけど，許されます．結婚もできます」といった次第です．

講演終了後は，通訳の女性にひざまずいて，その労をねぎらい，縦笛を吹いて感謝の意を表しました．さて，講演の内容は別の機会にといいましたが，今後の話の流れに関係することがありますので，少しだけ，内容に触れます．

なぜFSFをスタートしたか，GNUと名づけた理由，資金調達について，Copyleft，GPLについて，この10年間の経緯，Gnu/Llinuxについて，今後のプランなどを話したのですが，私にとって非常に印象に残ったのは，以下のようなかれのメッセージでした：

- 私は，人々を幸せにする活動をしたい，私はProgrammingが得意なので，それで人々の幸せに貢献したい．
- FSFの活動が経済的に成り立たないという意見をよく聞くが，私は非常にチープ(実際にcheapという単語を使います）に生きていけるから，この活動を続けることができる．
- Free SoftwareのFreeの意味は無償ではなく，自由である．Softwareを動かす自由，配付する自由，改変する自由，改変・再配布してコミュニティに貢献する自由である．

## 3. 電源 ー ホテルから成田へ

中国へRichardを送り届けるため，講演会の翌朝9時に，ホテルのロビーで待ち合わせて一緒にTCATへ行くことにました．ホテルのロビーで9時5分まで待ってもかれは現れません．部屋に電話をすると，"I am sending emails." とのこと，私の答えは "OK, I am wating at the lobby."．「こういうこともあろうかと，時間に余裕を持っていたのだよ，はっはっは」という気分でした．

9時30分にチェックアウトしてタクシーに乗り込んだとたん，

"Don't you think we have too much time for the flight at the Narita airpot?"

"Yes, but it is for just in case. You have a lot of time for mailing at the airport."

"OK."（非常に軽く）

どうも，かれはいつもメイルをチェックしていないと心の安定が得られないようです．逆にメイルさえ確認できていれば，ご機嫌です．引地君によれば，かれはいつも旅行をしているので，あらゆる相談，確認，指

示をメイルで行っており，それで完全にうまく物事を管理できていると確信しているとのことです．SEA 事務局長の岸田さんにいわせれば，「そんなのは単なる幻想」だそうですが，，，

TCAT までは順調でした．TCAT について China Eastern Airline にチェックインしようとしたのですが，JAL のチェックイン・カウンターを間借りしているために，10時 30分からでないとチェックインできないとのことで，Richard はちょっとご機嫌ななめです．40分ほど待たねばならないので，2階に移動し，椅子に座っていると，早速電源を捜し始め，掃除機用の電源を見つけると，床に座り込んで mailing を始めました．僕が貸している PHS データカードはきちんと電波をキャッチできているようです．よかった，よかった．

そばによって見ると，Toshiba 製の分厚い Note PC を広げ，そのキーボードの上に Happy Hacking Keyboard を重ねてタイプしています．なぜかときくと，Note PC のキーボードで腱鞘炎になって以来，Happy Hacking Keyboard を持ち歩いているとのこと．Note PC も Happy Hacking Keyboard も寄付されたものだそうです．PC にインストールしてるのは GNU/Linux だけ，X-window も必要ないそうです．たしかにチープに生きているなと感心した次第です．

Note PC は一年前に貰ったというにしては妙に分厚く，古臭く見えるものでした．最近はバッテリーの調子が悪いので，いつも電源を捜しているのだそうです．最新の Note PC を買って寄付しようかしら，と思わず考えてしまいました．SEA の有志でお金を出し合って，寄付しませんか？ 少なくとも Linux を使っている人には賛同してもらえると思うのですが，.....

それにしても，いわゆる，本物のプログラマというかハッカーと呼ばれる人たちは，なぜか Happy Hacking Keyboard が好きですね．わたしの周囲では，青木淳さんも Happy Hacking Keyboard 派です．どこがよいのかときくと，実際に使って Programming してみれば分かるとのつれない返事．マネージャの孤独感を味わいました．

成田では，昼飯に寿司を食べ，大変ご機嫌でした．食べ物には非常な執着を示します．昼飯に何を食べるかを尋ねると，すぐに長考をはじめます．いくらが嫌いだそうで，何かと交換してくれというので OK したら，何をトレードするかでまたまた長考．子供のようで憎めないところが救いです．

名刺交換のときのかれのせりふは：「僕は，ビジネスをしていないので，ビジネスカードは持っていない．これはプレジャーカード(pleasure card)です」というもの．そこには，かれが愛しているものとして，sharing good books, good food ,exotic music ,dance列挙されています．酒は飲みません．美味しいものを食べるのが，唯一の贅沢のようです．単にチープに生きているだけでなく，シンプルでもあるなと感心しましました．

遠目にみると，怪しいヒッピーのようにしかみえませんが，近くによってよく見ると，非常にきれいな目をしています．あの目で，人々の幸せを語るところが魅力なのでしょう．

### 4. 上海 ― 熱烈歓迎

成田では何事もなく，飛行機に乗りこめました．上海から ISFST99 の開催地である南京までは，高速道路をバスで行きます．バスの出発時間まで，一時間ほど時間の余裕があったので，SEA事務局長の岸田さんが Computer World Magazine China のインタビューを設定し，Richard も OK していました．

Richard は，上海空港で入国 VISA を取得する手筈で，必要書類，写真などを持ってきています．空港の VISA 発行官も昔とは違って，日本のお役所程度の手際と愛想の悪さになりましたので，Richard が少しくらいやんちゃをしても大丈夫であろうと，引地君も僕もあまり心配はしていませんでした．係官がのろのろと処理をしているのを見ると，Ricahrd は早速，係官のテーブルを使って，両手叩きの Drumming を開始し，係官を威圧します．係官はちょっとむっとして，何もいわず，かれの目を見据えて Drumming をしている手の上に自分の手をかざして，Drumming を停止するよう，無言の要求をします．一瞬の緊張の後，Richard は Drumming を Dance に切り替えました．これには，係官も何もいいません．のろのろと処理が進み，何とか VISA が発行され，手数料を支払うことになりました．

係官：費用は 80 ドル．
Richard：80 と 0 ドル？
係官：そう．
Richard：では 80 と 0 ドル．

といって 20ドル札 4枚と，コピーで作ったと思しき 0ドル紙幣を渡しました．

係官（ギョッとし，目をむいて）：この 0ドル紙幣はどういう意味か?
Richard：.....

またもや，緊張の一瞬．引地君が間に入り，「何でもない，何でもない，単なる冗談です」を連発して，その場を切りぬけました．

やっとの思いで，入国審査を終えて，空港ロビーに出ると，とたんに，10数人の中国人がフラッシュの

嵐．なにやら本格的なビデオを持った人や，"Welcome RMS!" と書いた紙がはためいています．どうやら，取材人が出迎えているようです． Richardはその10数人に取り囲まれて，近くのレストランへ．付添いのわれわれ２人は， Richard の荷物持ちと化して，ヨタヨタとついていきます．インタビューの間，われわれはラーメンと焼きそばを食べながら待っていたのですが，いきなり，１人の中国人が側に座り，興奮気味に，「Linux ビジネスの会社を上海で経営している」と自己紹介．その後，やはり興奮気味に「ご存知ないかも知れないが， Mr. Stallman は中国のある種の技術者の間では，神様のような存在です」と語って戻っていきました．僕と引地君は苦笑いです．

**5. Live Cheap**

約１時間にわたるインタビューが終了し，バスも到着したのことで，早速乗り込み，南京へ向かいました．高速道路を突っ走って，４～５時間の道のりです．最近の中国の道路網の発達は目を見張るものがあります．バスの中で，引地君に Richard の話を聞きました．

いろいろな話の中で印象に残っているのは，かれが MIT AI Lab のある教授が所管する一室を与えられて，なんとそこに寝泊りしているということです．以前は，寝袋で寝ていたのだそうですが，最近はソファーが入ってその上で寝ているのでずいぶんと住環境がよくなったとか．自分の家は持っていないのだそうです．

引地君の話では，Richard は年間 100万円程度の生活費で暮らしているとのこと． FSF への寄付はすべて他のメンバーのために使っており，自分は別の収入の手段を持っていて，その範囲で質素に暮らしているのだそうです．「ほんとうにチープに生きているのだな」と感心しました．

FSF はいつも資金繰りで苦労しているそうです．一時的に高額な寄付をするよりも，継続的に毎年一定の額を，たとえ小額でも寄付する方が歓迎されているようです．年度計画を立てるさいに，毎年，寄付の見込が立たないので，誰かを解雇しなければならないという危機に陥っているのだそうです．継続的な寄付の見込が立てば，開発計画をもっとスムーズに立てることができるのに残念だと Richard もこぼしているようです． SEA で寄付を募ってみようかなどと考えていると，中間地点あたりのサービスエリアにバスが入っていきました．

「南京でレストランの予約をしているので，夕食は遅くなるけど南京で取ります．ここでは，休息とスナックでも食べてください」とのアナウンス．高速バスはすし詰め状態ですので，みなさん新鮮な空気を求めて，よろよろとバスの外に出て，小さな売店に吸い込まれていきます．

日本では見たこともないスナック菓子などが陳列されています．何があるのかと眺めていると，背後から Richard が「あの Prawn Cookie は，俺がシンガポールで食べたものと同じだろうか？」と質問してきます． Prawn Cookie ？と思いながら，「シンガポールには行ったことがないので知らない」と答えると，どこかへ消えていきました．ピスタチオとウーロン茶を買っていると，「あのprawn cookieを一袋買ってくれないか？」と，また，背後から Richard．「いいよ」と答えて，かれが指差す先を見ると，そこには「かっぱえびせん」のような袋があります．「これか！」と思いながら，買ってあげました．飲物も欲しいとのことで，ちょうどウーロン茶を買っていた岸田事務局長が１本余分に買ってあげました． Richard はとてもうれしそうに，Prawn Cookie を食べながら，ウーロン茶を飲んでいます．「ううむ，たしかにチープに生きている人なのだ！」と，心の底から納得してしまいました．

**6. 最後に**

ISFST が終った後， Richard は再度日本に立ち寄り，青山学院大学で，FSF 主催，SEA 後援のセミナーを行ったのですが，そのさい，階段で転んで Note PC を壊してしまいました．一時間たりともメイルをチェックしないではいられない人なので，大騒ぎです．青学の学生さんの努力で，何とか修理したようですが，もうだめかも知れないので，新しいマシンを買う必要があるかも，という話をしていたとき，新しいマシンはできれば軽くて，薄いものがよいといってました．

FSF への寄付金は，できるだけ開発人件費にまわしたいらしく，自分のマシンは現物支給されたものを大事に使っているようです． Richard に，早くて軽くて薄い Note PC の最新機種を贈呈し続けるなんていう粋なメーカーさんはでてこないのでしょうか？ GNU/Linux がそのマシンで動くということの立派な証明になりますよ！ PFU さん， Happy Hacking Keyboad を贈呈しませんか？ かれは GNU T-shirts にサインして返すときに必ず，"Happy Hacking！" と叫んでいるのですが，.... .

# 自由软件之父 Richard Stallman

□ 本报记者 柯志雄

理解 Richard Stallman 这样的人不是件容易的事的，尤其是当时间只有2个小时。

所幸是独家专访，Richard Stallman 为此也做了充足的准备，于是谈话几乎没有停歇地进行着。有意思的是，被采访的他却先问了我一个问题。

**Richard Stallman：** 在中文里，free software 怎么解释？当你们说到 free software 时，你们会谈些什么？

**记者：free software 翻成中文就是自由软件，这个概念强调利用软件的自由度，有些人常用“开放源代码软件”这样的名词替代它。**

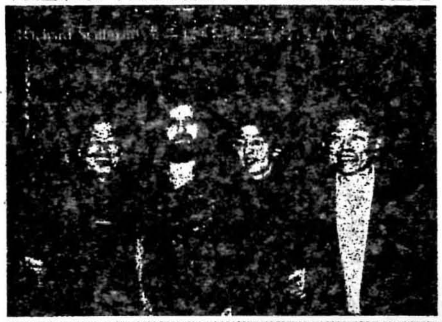
**Richard Stallman：** 在很多语言中，自由与免费不会搞混，英语是唯一的一种会混淆这两个含义的语言。从1971年我在麻省理工学院人工智能（AI）实验室工作开始，我成了一个已经存在多年的软件共享群体的一分子。当然，软件的共享并不限于我们这群人，但我们做得比大多数人都多得多。当时我们没有把这些软件称为“自由软件”(free software)，因为这个词语当时还不存在，但事实上那就是自由软件。 每当其他大学或者公司的人要求移植或者使用一个程序时，我们总是应允的。如果你看到某人在使用一个陌生而且有趣的程序时，你总可以要求看它的源代码，以便可以读它的代码、修改它，或者套用源代码的一部分来创作新程序。每个人都喜欢拷贝，我认为每个人都有权利拷贝，拷贝任何东西。

**记者：在这个商业社会，很少有能脱开商业利益来谈论的东西。有些公司认为自由软件会使他们没有足够的利润去发展或编制好的软件。**

**Richard Stallman：** 我的观点在道德层面上是很重要的——鼓励人们相互帮助，鼓励人们分享软件，使人们能自由地对软件进行修改。编制可供分享和修改的软件对社会是非常有益的贡献，这是一件好事，我们应奖励这么做的人，因为他们让这个世界变得更好。但是有些编程序的人说：“你不能修改这个程序”，把它的工作原理称为商业机密，掩藏得严严实实的，那不是对社会的贡献，那只是想控制别人，它实际上是倒退。我在1985年创办自由软件基金会，目标就是改变这种状况，把这样的行为清理掉。很显然我们已经取得了一些成功，将来会完全成功，需要多少时间谁也没法说。现在很多人知道 Linux，但 Linux 不是操作系统正确的称呼，正确的称呼应该是 Gnu/ Linux 操作系统——一个自由的操作系统，现在正是往 Gnu/ Linux 操作系统上面添加应用程序的时候。反对自由软件的意见中有部分来自于这样一种假设：如果不允许某个公司凌驾于其软件产品的用户之上，我们就不会有任何可用的软件，或者永远不会有完成这样那样特别的任务所需的软件。这个假设一度显得颇有道理，但是自由软件运动表明，我们可以创造出足够多的有用软件，而无须加以种种限制。

**记者：现在对于 Gnu/ Linux 系统的普遍看法是对于个人用户而言它难以适用，而且缺少应用软件。我曾试着往笔记本电脑上安装各种版本的 Gnu/ Linux，花了很多时间，但都失败了。您了解自由软件在中国的发展状况吗？另外，如果中国的软件公司想加入自由软件基金(FSF)，需要做何调整？**

**Richard Stallman：** 自由软件基金会不设会员制，也没必要成为什么会员，重要的是你能否编制出自由软件或会为自由软件做哪些事。一个软件是不是自由软件，关键是看你附加在软件上的许可证条款。你可以宣布你参与了 GNU 计划，支持自由软件基金会，我很愿意看到你谈到这一点，不过我不认为这些公司需要做什么改变。大多数情况下，他们工作方式没有改变，不过电子邮件变得异常重要，我们从最早开始就使用了电子邮件。GNU 计划是个国际性的计划，我们关心的不是地区性的问题，也不针对某个具体的国家，我们想做的是对所有国家有益的事，在 GNU 软件对中国有用的时候，其实对美国和其他国家都有利。我们不认为我们为中国已经做了什么，好象也没发现 GNU 系统里的什么自由软件是从中国出来的。中国近来富裕了许多，但在发达程度上还有待提高，我们能使之受益的使用电脑的人和程序员还是不够。我们针对的不只是软件公司，还包括个人——个人可以通过取得公司同事、邻居或其他人的帮助，愉快地工作以对自由软件做出贡献。



**记者：很多人在提到你的时候常常提到比尔．盖茨，你有没有考虑过与他做些比较？**

**Richard Stallman：** 我并不想说我比他更强，但我想对于这个世界我做的比他多，其实近些年来他甚至没有尝试着这样去做。他知道如何让人们愉快，但他试图通过操控人们以得到他们的钱，希望得到、得到、再得到。他得到多少钱我并不关心，我要指出的只是他如何得到这些钱的。

**记者：自由软件的安全性问题你是如何理解的？会不会有人通过读取源代码来发现自由软件的安全漏洞？**

**Richard Stallman：** 怀疑自由软件的安全是没有根据的。当自由软件被发现出现问题后，就会有人快速地加以弥补，如果软件不是自由的，没人能跟踪发现这些问题。自由软件你有办法检查其安全性，而你没办法看出微软做了什么，或许谁帮助了 CIA 都没人会知道。通过假设来判断安全性是没有意义的，事实证明了自由软件的安全性。

**记者：Steve Levy 在他的著作《黑客》中把你称为最后一位真正的黑客，你同意他的看法吗？**

**Richard Stallman：** 我不认为我是所谓的最后一位真正的黑客。曾经有很多人离开这支队伍，但在我之后，出现了许许多多真正的黑客。我想他们是一些特别的人，很难让他们放弃他们坚持的东西。我很高兴看到我们这个群体把一些好的传统保留下来。

## 走近『现代普罗米修斯』

□ 本报记者 柯志雄

1999年11月，虹桥机场。从美国起飞转道东京应邀为南京国际软件研讨会作主题演讲的他走下舷梯，在沪稍作停留。在这座有着众多自由软件爱好者的城市里，这位自由软件之父匆匆而过，2个小时在机场的专访使我们有机会走近“现代普罗米修斯”。

一头卷曲金发的 Richard Stallman 在走下飞机的乘客中非常显眼。

庞大的身躯原本就使脚步不是那么轻快，3个硕大的包更使他的行进速度放慢了许多。于是，在其他乘客急冲冲地朝出口走来时，所有接机的人无可回避地都注视着他。还有什么比迎接晚到的飞机更让人心急的呢？没有。于是，当 Richard Stallman 和其他人从通道口徐徐走出时，整个人群顿时欢腾起来。

采访过程中没有见过他的笑容——即使他在开玩笑的时候。这样一个严肃的人，你很难把他与“天真”这样的词联系在一起。但当他拿过金发的末梢放在手尖又出声时，又能用什么更为严肃的词汇去形容呢？

他的肚子向前凸出，这使得挤进桌子与座椅之间分隔出来的狭小空间变得有些困难。不过坐定以后，他的话便滔滔不绝。打断这些犹如泉涌的大言很难，尤其是谈到 GNU 计划的时候。一旦开始他的谈话，Richard Stallman 就进入了他的个人世界——也是所有崇尚软件自由的个人组成的世界。

就 Richard Stallman 而言，软件产业无关紧要，国家也不在考虑范围之内，他不想过多地讨论自由软件对商业的影响或对某个具体国家的影响。在他的视野中，个人是焦点，个人能在多大的程度上享有软件的自由才是他最关心的。

使整个自由软件产业尴尬的是，商业与金钱是不容回避的话题。今天 Bill Gates 可以从容地谈论对他富可敌国的财产的处置，他的天文数字的财产扔到任何一个国家都会发出“咚”的一声巨响，把当地的金融货币市场搅个天翻地覆。与此形成鲜明对比的是，Linus Torvalds 还在过着“小康生活”，甚至不能影响离他家最近的便利店的货品价格。Richard Stallman 说他不很穷，当然他也不富，这是每一个准备加入自由软件事业的人要试着去面对的同一景况。他们分享自由软件的源代码，也一起分享相似的富裕水准。

Gnu 标志物——一只长相怪异的牛是 Richard Stallman 的最爱，它给他带来了世界范围的声誉。自由软件基金会掀起的自由大旗更使他获得了“现代普罗米修斯”的美名。但 Linux 的声名鹊起使大众的目光部分（不小的部分）聚集在 Linus Torvalds 的身上。交谈中他几次告诉我，Linux 不是个操作系统正确的称呼，正确的称呼应该是 Gnu/Linux 操作系统。他所命名的 Gnu 应该在 Linux 的前头。他也介意声名？或许是的，在 IT 这个崇尚个人英雄的行业，有几个人能够逃过声名这一关？但在接受“最后一位真正的黑客（The last true hacker）”时，他明确地拒绝了这种说法，虽然这样的一种称呼更易使他成为亿万年轻人心目中的英雄。

当话题涉及自由软件或授权时，Richard Stallman 表现得极为健谈。同样，谈到 Richard Stallman 的时候，不能不提到 Bill Gates。如果说1980年 Bill Gates 大声斥诉“软件盗取行为”，警告世人这样会破坏整个社会享有好的软件的时候是软件产业的历史性的一个大转折的话，那么1991年 Linus Torvalds 在众望所归中开发出 Gnu 操作系统的核心——Linux 时，出现的是软件业的另一个分水岭。在 Richard Stallman 眼中，微软看法的实质是阻止帮助邻人，抑制了软件对社会的作用。令他遗憾的是，在英语中 Free 更容易让人想到免费，而不是自由。实际上原有的自由软件阵营也慢慢分化成两个派别，这或许是 Richard Stallman 不愿看到的，或许是他不在意的——比起既有的团体，他更注重把个人聚合成新的专注追求自由创造的松散的群体。

采访临结束前，他取出笔记本电脑，用机场候机室的插座充上一会儿电，眼前又将是一段新的不全自由的自由旅程。

ソフトウェア技術者協会
〒160-0004　東京都 新宿区 四谷 3 - 12 丸正ビル 5F
Tel: 03 - 3356 - 1077　Fax: 03 - 3356 - 1072
E-mail: sea@sea.or.jp
URL: http://www.iijnet.or.jp/sea